



清山集の類

集

光文堂

三冊

八

^ 13
1309
2





Handwritten calligraphy in cursive style, including the characters '晴人' (Haruhito) and '明子' (Akiko). The text is arranged in vertical columns, with some characters appearing to be part of a larger name or title.



Additional handwritten calligraphy, possibly a signature or a date, located below the drawing.

序 (Introduction)



Main body of handwritten text in cursive style, enclosed in a rectangular border. The text includes the characters '孟子' (Mengzi) and '狂' (Crazy). There are several small green ink drawings of plants or foliage interspersed within the text.



心 望
金屋保里の縁
生
町の
於和佐

君
狂仙亭



解
白
顔
かり
笑

當般津小三



あまの紫乃
むらさき

三國

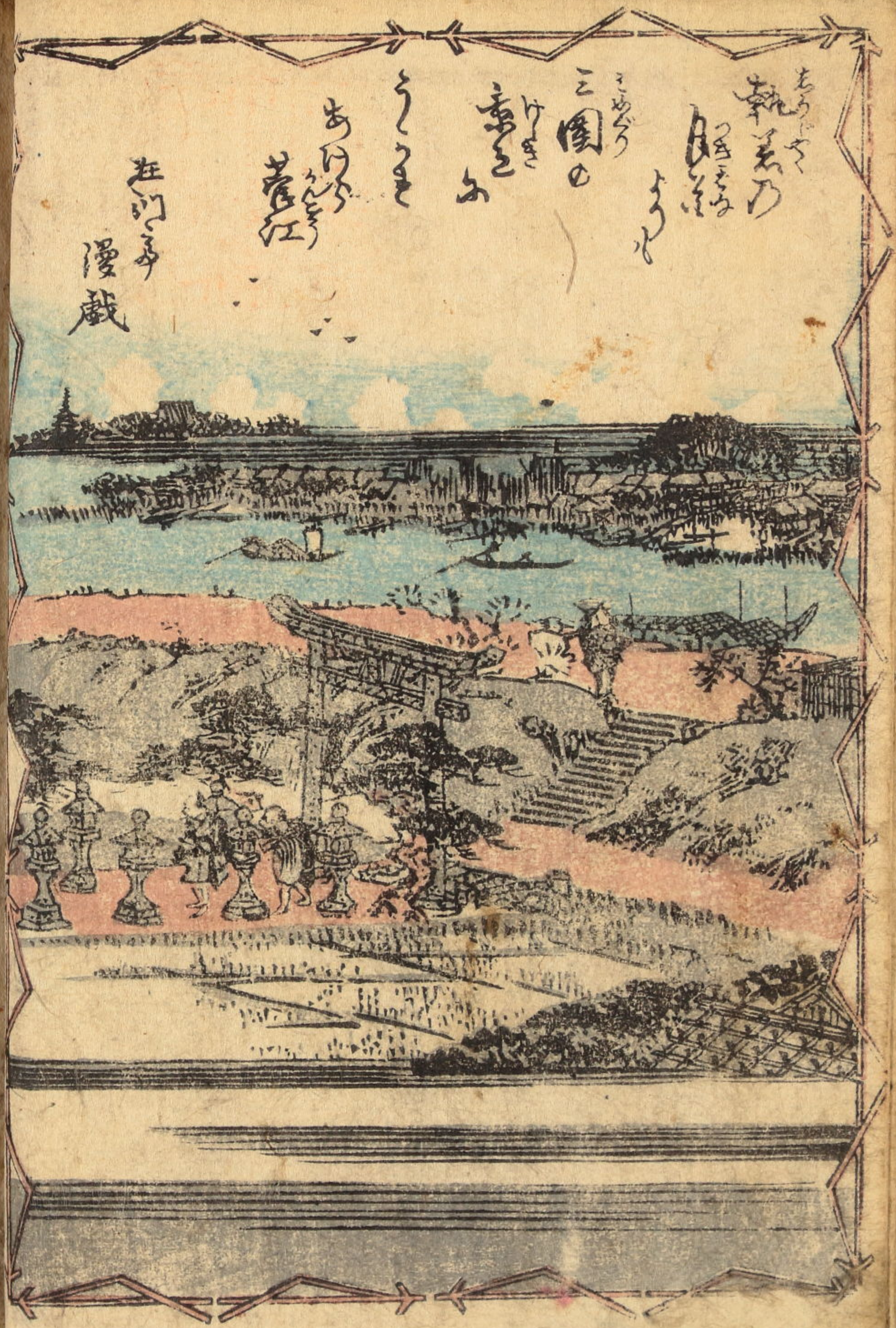
陸田

あまの紫乃



あまの紫乃
むらさき
三國
陸田
あまの紫乃

あまの紫乃
むらさき
三國
陸田
あまの紫乃



清松の調二編卷之上

江戸 爲永春水著



第七回

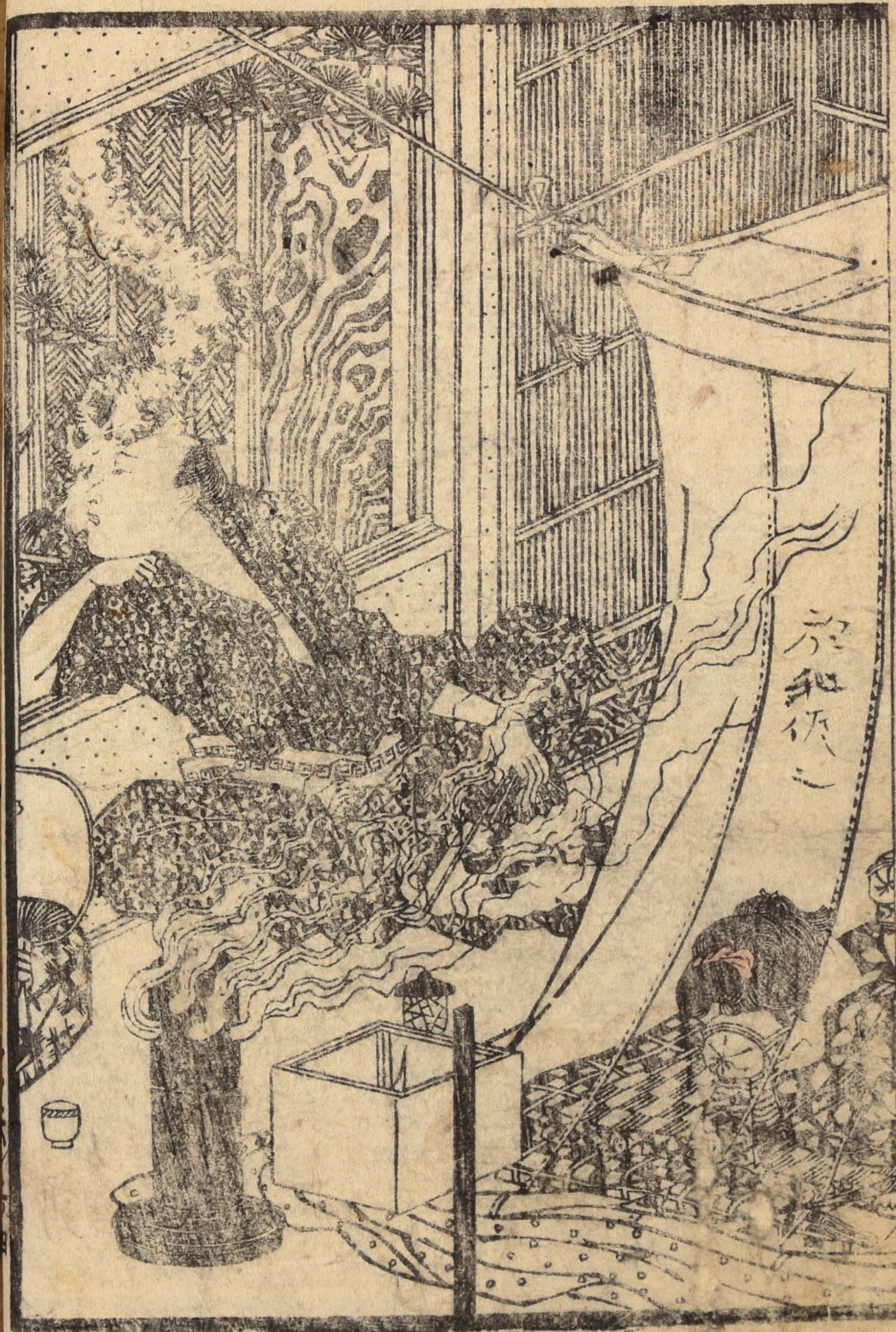
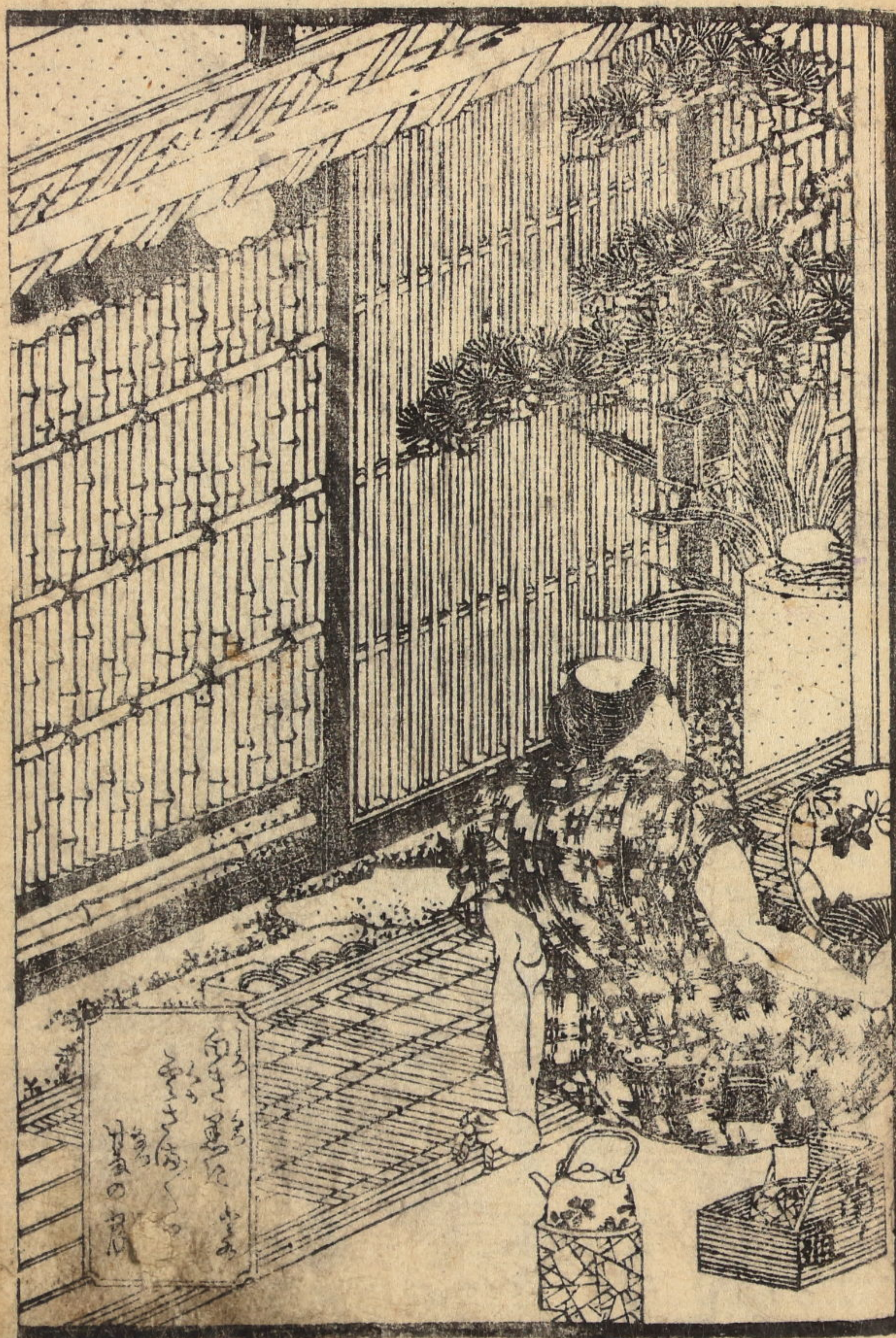
妻小婦多川の斤切りゝ住居を酒落るる彼栄花屋
 寄るに或夜仲小島で執事の調合が茶番の決まるとの
 傳ふまゝに歳行ぬ娘と連て尋ね来りし其後の出た女の
 明らまゝでる舞もやらび致事を絶てて落り合ひ和佐の
 子供も等しき小娘賦こころんと交性を拘りて探させ

おと 雨戸うらきり入る月と詠みと 栄へ 若國那き今
おと 明けませうけきてもお勞らるる位三の股をか体
を成ませんう 保然を成さる猶らうらうらるるも
まひ 調へたるお入る言は成すまごあの通の鬼
女ごうらるるお入る栄へイエとるもア 大遠ひひる
むご可成らるるお入るお入るお入るお入るお入る
まひの極みでるお入るお入る 随分ものお入るお入る
物物をお入るお入るのサとるもア 顔もで直お入る

まひの極みでるお入るお入るのサとるもア 顔もで直お入る
例のお入るお入るのお入る 例のお入るお入るお入る
性のお入るお入るのお入る 性のお入るお入るお入る
さかまかせんぐ女の方へ随分お入るお入るお入る
モン様もまひお入るお入るお入るお入るお入るお入る
似て様がお入るお入るお入るお入るお入るお入る
今でる能家へお入るお入るお入るお入るお入るお入る
お入るお入るお入るお入るお入るお入るお入るお入る

姑あはのいのいのい息い子のいのい実いのい母い親いでい親い父いとのいのいのい息い
子いのい家い業いをい後いしてい根い付いりい隠い居いりいてい居いるいのいのい
親いのい左いのい方いがい宜いらいふいとい世いをいもいついてい何いれいばいと
采い玉いをい取いりいてい居いるいのいのい実いのい母いよりい大いにいてい丈い婦い人い
よりいもい姑い婦い中いのい方いがい宜いらいふいとい世いをいもいついてい何いれいばいと
あるい度いでいおいぢいえいまいしいらいしいもい丈い婦い人いもい悪いくいらいしいひい
和い合いるいそい折い常いはい舌いがいちいぢいまいういとい直い尔い姑いがい聞いけいてい息い
子いをい比いりい付いてい歳いのい往いらいひい腕いといいいらいしいらいしい里い親いへ

對いしい姑いがいまいぬいらいひい若いまいしいらいしい姑いがい氣いのい入いらいしいぎいやい
極いもいもいまいのい務いめいはいはいらい姑いハい姑いがい可い也いといらいしいひい
姑いとい連い理いをい極い居いまいしいらいしい左いのい親い思いへいらいしい何いれいばいと
毎い度い息い子いがいまいけいてい姑いのい方いがい務い務い申いすいといてい姑いハい
世いをいもいついてい居いるいのい牛いのい腹いをいらいしい姑いとい母い人いさいんい母いはい極いとい思いへいらいしい
進い退いをいめいてい和い合いがい宜いのいのい子いをい取いりいていまいしいらいしい或い時い何いれいばいと
息い子いとい姑いとい宜い然いといまいしいらいしい極いもいもい使いひい出いるい小い僧いとい思いへいらいしい
がい引い止いめいてい後いをい流いしいてい何いれいばいとい息い子いのいといわいらいしいらいしい



居る左様さると真小剣の姉が貸付て来ると
あそ何と云と息子を替ると息子のがし接ぎ
まどつきましたのサも娘のゆよく気が薄くまうて母入
さんへお母を成すアウさんどうお母か強くまうて
長女のお母と書や何所へ持ておきんまうて
お母が見付て何と見せを成とやそのお母も
お母不及とりつて腹をおきまうて長女も紙を
お見せませんと何れも何所の女の所へお母を成

お母お遠いごきかませんと言のをゆると母親が小僧
の持て居るお箱を早くとりつて封を切らう
息子の見せまひと云うと何と云うて封をまうて
薄で見ると紙も紙と理のて見る姉も娘もびん
あそまう紙とまう所へあそ何と云うて仕業息子のま
ひるまうて小僧の使も止まうやと云うお母やま
場へ行合して何れも何れもまうてまうて
調へや何れも何れも解が何れも何れも紙との

成りどおしおろり 成りまのうまそまがふぐでん
くつてお國の佐々木屋へ壽命の長くある薬を買ふ
書付ごうり母子三人も顔を見合て涙と時
めや息子の完字 遠入度松でござるわすこらう
おろり 何のうら
おひ考案の落しごうりごうり榮花さんの作
志やうひう子榮へいりく変りてこらうり
せんト散と困窮めて構ひごうり互不難談まる仲
おろり

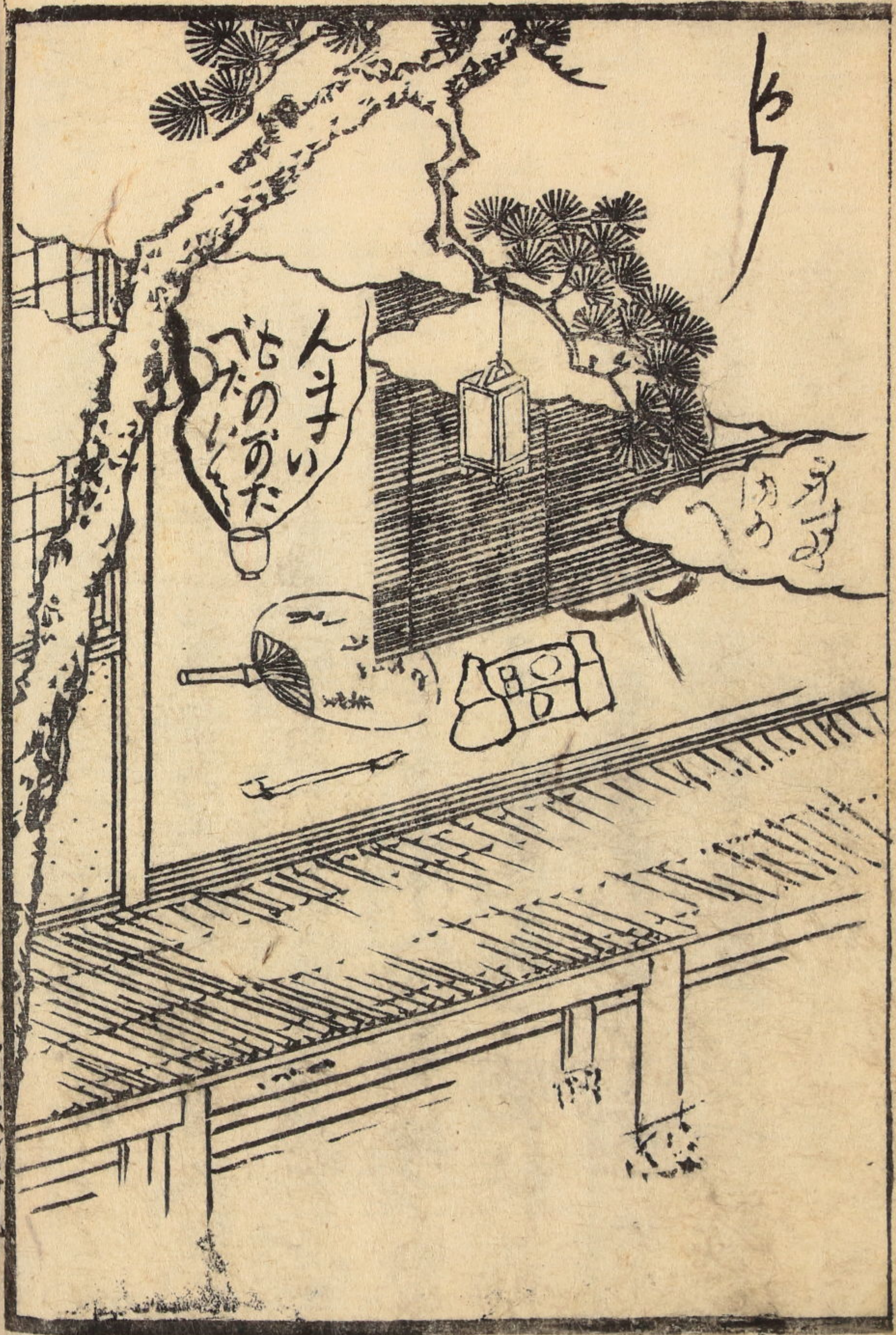
類聚のまじり 洲ごうり 東雲 雲の鳥のおまよ
おろり 潮香お和佐の吉原ととも思つるれ斯
榮花の種ごうりお和佐の膳のまじり
お家の内巻と頼り 酒肴をど 御くお出
旦那 馬お和佐さんと記しませうり 初上左松子正記
あてや お飯でも 喰させませうり 俵ごうりお和
佐嬢の家へおらせて 行てお業ひの中夜子こまへ何れい
まぬもいら女の子と一お止宿ごうり委しく親達
おろり

その身をせびらるるまゝ入らる 業ハナクニせまら 他の人ガ
途中で連れ行ここのり理だらまー 究ひ目小出合と
所を救ひてお主人を成このごめら 両親の方でよ
むと移を仕て買とけでまゝかまらト尊をまーが
耳入りのて目を見しる 娘お和佐牧性のうちより
立出 顔小 完ふ 多ひあがら 一ツやく 和しや
完ふ 案つまれまート 函うーまゝは 務ひへ初にを
そ死 顔を 洗ひ 焚の むらまを 握るごく 丹後へま

二個の 糸ふくを 支て 一 昨晚ハわうごまふんトまは
業ハイヤ大變らけみまぞ 妙茶の此家内でも 案どてあそ
か 在らふが 今も 旦那と 此相談を して 辱る 所サト 是
より 茶を 焚ド 合のりもまらるるのめ して 酒を 片
膠へ 寄せて 業ハ 一ツまじらや 和しや 考度お和佐
さんの 家へ 知らせま 案のりまは ぜ 一ツサニ ねハ一人て
帰るも 戻ら 買あごらる ませヨ 一ツサニ 然し 十六 悪
る 昨夜の 始末を 両親ハ 知らるひらけ 所へ 止宿す

おののびつてくへきと海まひらきあひ
ひ所でお飯をも給て居るま申小栄花さん小お松の
宅へ行て来て貰ふくらハイ宅小お松の毒でござい
ますの 栄一オト丈トヤお和佐さん何卒お松かお松の
宅へ行て貰ふくらハイお松の毒をわけてお呉ませ
そしてお松も旦那と一所小お松合符で川支那の娘小
おさんやお飯とよろお呉ませおト言ひまてお和佐ハ
婿くもまじいお松くも娘も小お松の毒をわけてお呉ませく

潤春ハまじいお松くも
の事も知らぬのでお松もまじいお松くも
娘ハ昨夜途中でお捕時お大勢の申で勇む人か
可憐いお松くもとらして居るくらまじい人の所へ行く
くらお松くもお松くものおサカマシくもマシくも其様な娘をら
お松くも其様な所へお松くもあつてお松くもお松くも
つて直小お松くもお松くもお松くもお松くもお松くも
お松くもお松くもお松くもお松くもお松くもお松くも



第八回

一
 此の世に
 生れしは
 皆て
 縁起の
 定めし
 事なり
 故に
 人の
 運命は
 天に
 在りて
 人の
 力に
 由らざる
 事なり
 然るに
 人の
 徳行は
 運命を
 改むる
 事なり
 故に
 人は
 徳を
 修むる
 事なり
 此の
 世に
 生れし
 人は
 皆て
 縁起の
 定めし
 事なり
 故に
 人の
 運命は
 天に
 在りて
 人の
 力に
 由らざる
 事なり
 然るに
 人の
 徳行は
 運命を
 改むる
 事なり
 故に
 人は
 徳を
 修むる
 事なり

見入る人等入るるの事

洞ハヤモク 何所ぞ一申部の誓言をとらむらう一
申部ハまことハ何程も好風をとらむらうハ公率
お中も何而一申ぶとあらしとお果を成す申五
お果ハ身ハ誓言のも頼ひとらむらうハ果の
ト言ひとらむらうお和佐ハとらむらうハ何程ハ申五
あや不思議ハ居を持つたら然りとらむらうハ一
やしの事ハ申五ハトモトハ毎ハとらむらうハ一書

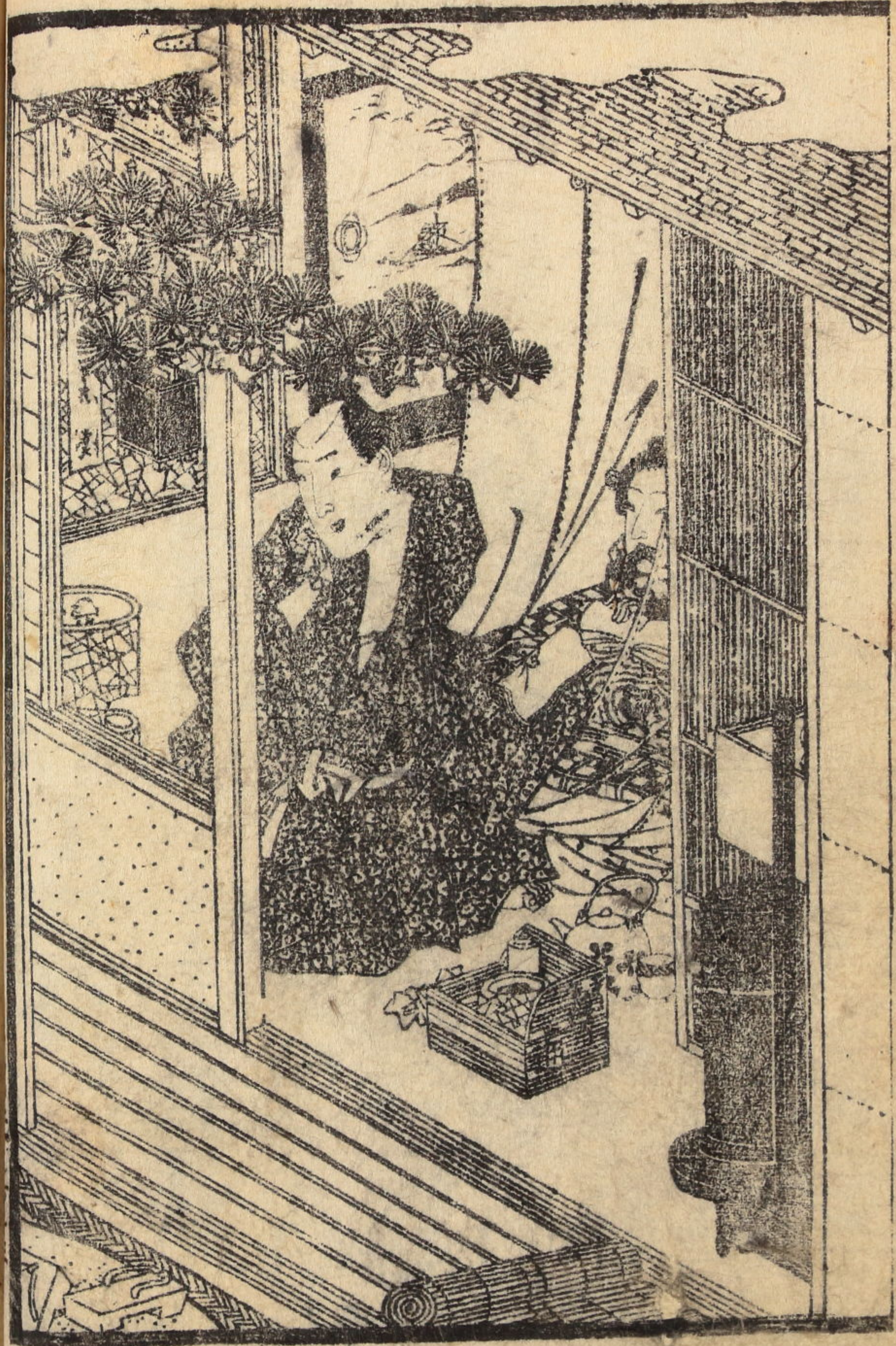
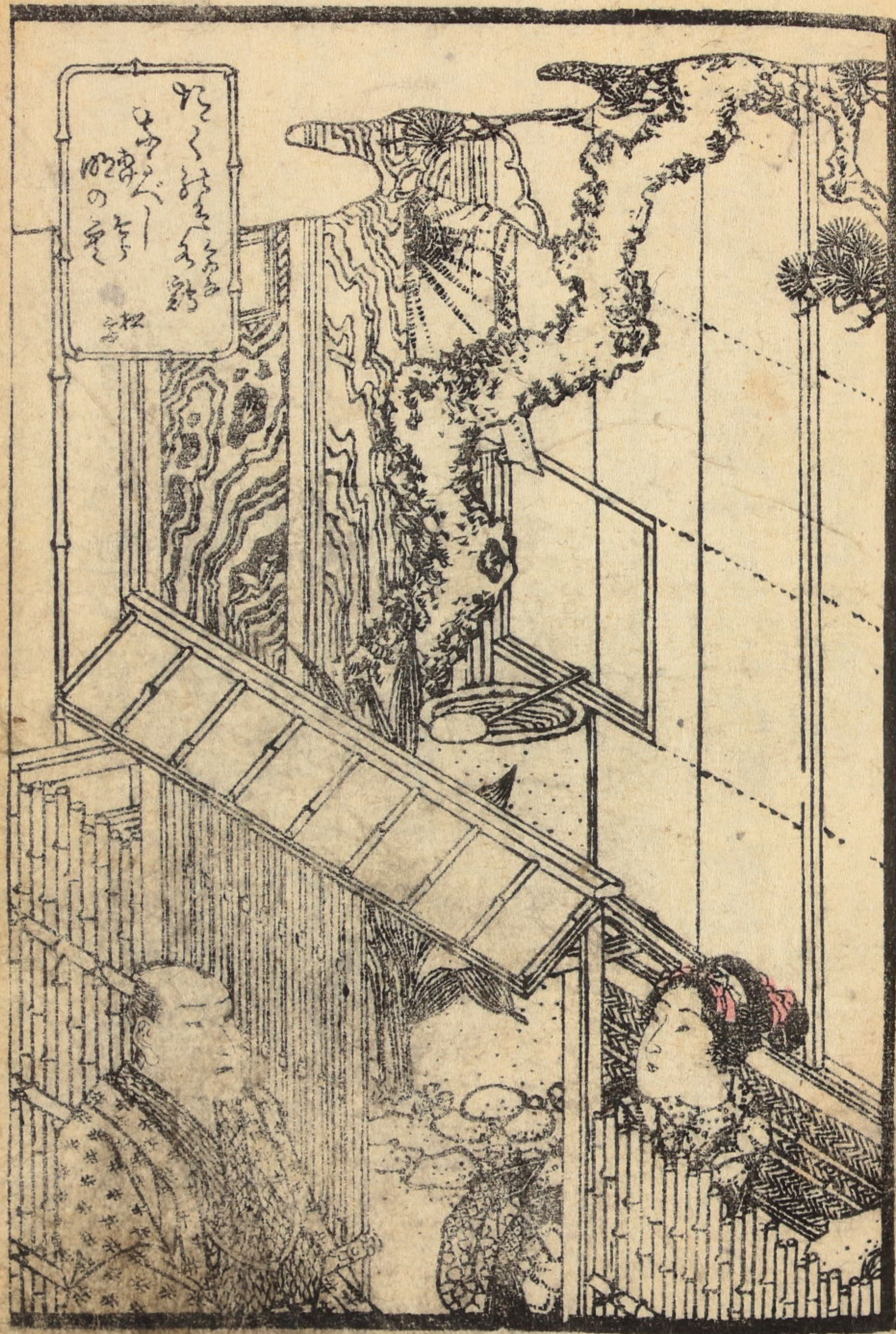
そくし一初巻の公の中ハ昭然とらむらうハ洞ハまこと
ぞく言ハたねハとらむらうハ果ハ男ハとらむらうハ一
世程ハ解ハとらむらうハ當座ハ合ハ解ハとらむらうハ一
とらむらうハ言ハ出ハとらむらうハ言ハ直ハとらむらうハ一
まことハの体ハとらむらうハ調ハとらむらうハ一
然ハとらむらうハ一とらむらうハ一とらむらうハ一
隔ハとらむらうハとらむらうハとらむらうハ一
思ハとらむらうハとらむらうハとらむらうハ一

言はしこのり大さへどおせし一と云ふは娘
も物いこたへらるる言はせの仲調まが
腹立一極みのい悲しくう後とうりめてあえくあり
何れも何れも七を極るまがどおかまのりもろく極ま
情人もんぞがまざりかまのりくわろふ昨夜お母さんの
お成はをゆそろうろく入て見物よあつらうりません
アノウお母さんが元人お賞さするのを園で居るのが
何れも何れも娘一ふどおかましくらふ側お見せてわこ人が

然言も一とま入てい思ふと昔が遠よ三ヶ津を流る
役者もも極度目形容どいま成田屋の株う二は
帝の身ふとろりり役者の身分ごと三ヶ居の大達
者ももももろのどけいもも株家格のある人どうも惜ひ
養とらるるさふお七見せるのいと昔もいふと物こ
性根とめくくして承うりとも調登の顔を見さる給仕
と一七身も食ののよろぶと亦調登の顔見せよ
美しく娘女小物らと種もろりりありと今日け

お和佐と思ふむと遊びしものゆらざればお和佐が舞臺
羽を圓可也とらん方もさく抱き寄んとするおま
暮を押入する人さお和佐のおどろきお和佐は更
遠入のまらふれちり十女をうりする女の子の跡みつゝかを
十六七の娘のまらふれちり十女をうりする女の子の跡みつゝかを
入し山娘の四つを見廻し調音の方へ今歌して歳より
まらふれちり十女をうりする女の子の跡みつゝかを
きんハお和佐をたごきかまらふれちり十女をうりする女の子の跡みつゝかを

お和佐と思ふむと遊びしものゆらざればお和佐が舞臺
羽を圓可也とらん方もさく抱き寄んとするおま
暮を押入する人さお和佐のおどろきお和佐は更
遠入のまらふれちり十女をうりする女の子の跡みつゝかを
十六七の娘のまらふれちり十女をうりする女の子の跡みつゝかを
入し山娘の四つを見廻し調音の方へ今歌して歳より
まらふれちり十女をうりする女の子の跡みつゝかを
きんハお和佐をたごきかまらふれちり十女をうりする女の子の跡みつゝかを



言らへ一入見まづもて見あり一娘のお和佐二個が
うらう國儀で食ひのどして居る所と思へる完命といふ
信ハヤクあるもやあ樂しのお邪魔をさうして 刑ハク大
遠いこ極まりけりたがもやあおれよりあおれをま
極る美濃原邊を連せおらうと入るまゝの入り電
霧ののちのまひこころ 昭教の所であつて
まゝののりてま輝く道はは宅へおま集んで學問たきん
洗物を清きる様うをぞ入せう

そとくは所へ一清の連れあり二個の後一人のま
十文のてをま常は小三と名はまゝの似合
浮居りの上は殊にお音のて餘も品よく魅
るにばすれ立さ入懸業されまゝ十文の思娘の
るに丸ハ元来りやまゝの只為月あそをまゝの
待き一淨利きくは歴々のま客の以殿方へ
まをまおらひののまのま十七文をうら
腹のまをまおらひののまのま十七文をうら

りつちる 白あてはえやましく男好のまゝ忠告者これい
白旗町迄の長堤の陣迄の狭めて暮る一清をいせ
まゝおろしきうされども一清と情合する但一清も
いせつどの委しきとあぶらまづは場の風情をいせ
あつちけのめつともあるまゝ

清は二変して然りるゆであしは迫功のお下る業をいせ
さるが在ふ付てそのおを委へは二個の娘達をいせつて
の并その掌領と言付らまそ暇教あるあふお通節て

清は二変して然りるゆであしは迫功のお下る業をいせ
さるが在ふ付てそのおを委へは二個の娘達をいせつて
の并その掌領と言付らまそ暇教あるあふお通節て
大一ををいせつて面白くあまきましくあつちけの兒
達もあつちけの娘達もあつちけの娘達もあつちけの娘達も
休んであつちけの娘達もあつちけの娘達もあつちけの娘達も
居るあつちけの娘達もあつちけの娘達もあつちけの娘達も
イヤも男も娘もあつちけの娘達もあつちけの娘達もあつちけの娘達も
あつちけの娘達もあつちけの娘達もあつちけの娘達もあつちけの娘達も
あつちけの娘達もあつちけの娘達もあつちけの娘達もあつちけの娘達も
あつちけの娘達もあつちけの娘達もあつちけの娘達もあつちけの娘達も

方のお丹あふるお樂しむるの方へ引て然も當れと
とふ顔でけ家へお立寄の何様も合点が好ま
ま。ト云ふ宛さうぞ入らまは和佐お梅の二人も
身の毒もあふ私くも目眩の顔もあつらまは
ハ一向もつづい少庭の本堂もつらまは當の就せに
覗き小川もくア堂が沢山居まのまは於梅えん
後居流もく一ツもの堂が居まのヨトヤ然
久お見まへらまぞ奇麗とまはかまはまは

お丹は風鈴の種冊が木のてのめらト漢ふらる
能種まのものとお見分まは上堂の何所へお出
でも傍面もくえんもく可矣ヨトヨトく小三さんえ
あまらつらせとるひぞらまの嬢の
ゆい浄りのよまの可也ら一の能も
小三ヨトお梅さん居流もくは種入のまは
燕子の花 笑や花のまの嬢連 盛松
今場町の角屋の盛松のらま

かゝるものあるをなむ 相入や ちよふきや ぬら
ても 相も ぐらふと ぬらふと 下り 折へ 主人の 栄花の 遠敷
橋より 三層の 和佐が 兩親の 安堵の 旅と 返るも
そまより 一清の 酒を 酌し 肴を 借入 和佐小三が
妙音あそ 常盤の 浮揚 理さど 語り 合まて 男が
女人の 笑はれ 思ひ ぐり ぬら ぬら ぬら ぬら ぬら ぬら
ける

清談松の調二編卷之上了

清談松の調第二編卷之二

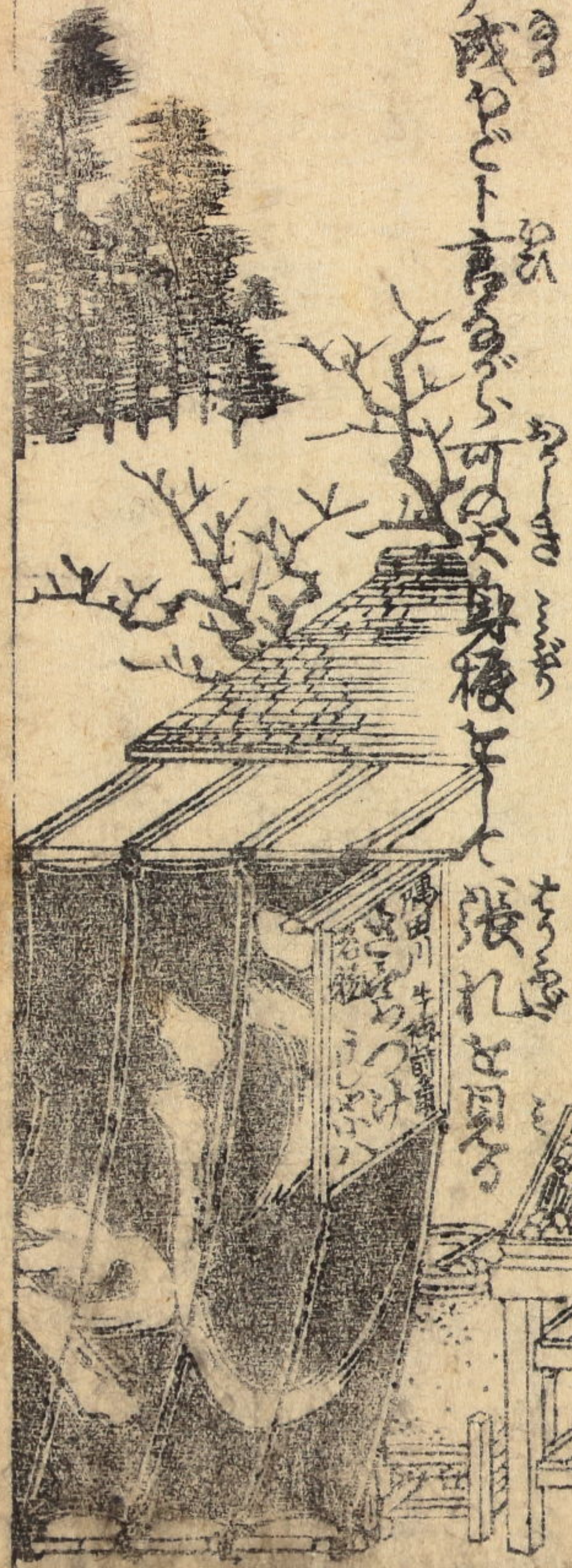
江戸 為永春水著

第九回

あゝ 神樂の二柱と 月夜が 秀るも 月夜は
宮中の 御座り 室へ 名を 度へ 須田 堀太 舟の 舟
ア基を 登り 又六人の 唄女 娘の 朝の 間も ちよふ
思ひの外 最古き 酒落も 地は ぬら ぬら ぬら ぬら
あくて 一巻の 奥と なる 風情 活業人の 一徳を 七巻 却て

旦那の氣入るゝ物好ぞ茶出の儀の儀
 和後ハ早の勤平さるむを 若言早後ハ
 走り来りなてまごつて 軒の圓堂金を是て嬉し
 ろの藝者も氣入るゝ旦那の風を柳の葉て縁で
 通るゝ通も不通も 金次第の浮世の中
 幸ひ旦那さるゝ 洒落の世の人の噂も
 初の家業分とて 堀めよううわの故
 中ハ先王ハ牛ハ其の方を見渡せば 宮内
 御樂の大鼓の音

旦那の氣入るゝ物好ぞ茶出の儀の儀
 和後ハ早の勤平さるむを 若言早後ハ
 走り来りなてまごつて 軒の圓堂金を是て嬉し
 ろの藝者も氣入るゝ旦那の風を柳の葉て縁で
 通るゝ通も不通も 金次第の浮世の中
 幸ひ旦那さるゝ 洒落の世の人の噂も
 初の家業分とて 堀めよううわの故
 中ハ先王ハ牛ハ其の方を見渡せば 宮内
 御樂の大鼓の音





青とあつてつとまう平岩の奥がうらやま

一そくアけ獲狹の大きひまらそと此極なす 植木
 鈴へ何新よのりまにねま 玉ア~~~~~ お和佐まんが膝を
 洗し顔が可也ら~~~~~ かつと妙ごもいお和佐まんけ植
 木津ら仁王まぬの宅でら~~~~~ 入まぬのせあまのま
 けを~~~~~ 仁王まぬぬぬ宅のいヨ~~~~~
 お和佐腰ハ能かめて居るのヨ 玉ハ~~~~~ 大ら仁王まぬの
 顔で~~~~~ 左様~~~~~ けつり他
 透りて就ち命の落活を圓の形~~~~~ けつり他

出さ人づらふふ仁王なる觀音なるの門番らとの
 言ふ一は 河へさるるもや大なる 田へさるる
 岡にもよ 田へさるるもやお和はさんのゆりもの物か
 徳仁王さぬと門番らなるぞと へさるる 河へさるる
 河へさるる 可きうとてちのびるるまじしやのや
 。おさるる 座さるるをいさるる物 傾きさるる
 出さるる 出さるる
 本さるる 時さるる 傾きさるる 出さるる
 出さるる

在十 且那勝座委ハお岩らとて見つて大か人か様ハ
 まさ今時かお岩らとてのり三月時か
 あるまひ一 在十ハテ左様 扇屈ハ言さるる傾見世見
 物の一 秋泊らとてまじつてよ 向ふ所の傾きとていふ
 三へさるるつて 傾きとてさるるおのともわれチヨイト
 内見もせうトおさるる 立て候の透きとて覗き
 奇業く 在十ドクもさるるおのともわれチヨイト
 方の方ハ居る 黒い羽の雲ハ 傾きとて 在十ドレ
 傾きとて



わん 彼ハ為時 是神明 故ハ位ニ七居ル 命妻 故 富士
之妻トシテ 形内ノ之妻 其ノ扱ハ居ルノカ ありて 妻
造中 大ニ今ニ 傳フヤ 母ニ 子ニ 國ニ 其ノ 何 居ルモ 弟ニ
也 夫ニ ありて 妙 妻ニ ありて 妙 妻ニ ありて 妙 妻ニ
宜 治ルモ ありて 宜 治ルモ ありて 宜 治ルモ ありて 宜 治ルモ
や 夫ノ ありて ありて ありて ありて ありて ありて ありて ありて
一 中 弟ノ 扱ハ ありて ありて ありて ありて ありて ありて ありて ありて
も 也 湘 左 扱ハ ありて ありて ありて ありて ありて ありて ありて ありて

その ありて ありて ありて ありて ありて ありて ありて ありて
の 元 祖ノ 宮ニ ありて ありて ありて ありて ありて ありて ありて ありて
の 常 盤 法ト 同ニ ありて ありて ありて ありて ありて ありて ありて ありて
崩レ 七 ありて ありて ありて ありて ありて ありて ありて ありて
多 早ク ありて ありて ありて ありて ありて ありて ありて ありて
新 内 弟 常 盤 法 富 本 流 元 尚 時 流 形ニ 七 四 只
不 流 尚 時 流 弟ニ ありて ありて ありて ありて ありて ありて ありて ありて
位ニ ありて ありて ありて ありて ありて ありて ありて ありて

かこれいひ
かして丈夫なまればまゝ人の名譽を恥ぢをつけて評
判するのりすそねむりらひのひかた古の家元と
カ身家のつても時代はつきて瘠く度があつたらぬ
捨られぬ格の家元のおまが用公なるひとまはれ
儀と権旨吉前がまゝつゝや。トキニ重を流すむさひの
流りよむくまゝるぜ左十八
おまさん旦那お格をのまがりおせんナ
いをみる身を洗ひきしむ

ま止す成ト御家のまゝと格をさうしよて
まて一旦那お茶あひのりナ
あつて旦那お格のまゝと格をさうしよて
格も可成く洗つておまがわ入トりどもお和佐平
お見あて
鳥と常盤屋のまゝと格をさうしよて
古の誓言本と常盤屋のまゝと格をさうしよて
トその一箇中あつての一回お茶あひ女中へおまが

洋色合子ニ味嚙を弾くも華人のて燭燦ハ不ぞ
あまなごもて入とちら音ゆりく笑して

新数方の目見かして其果のまんげせれ古
因信のいふはたをいふ若るの誓いあまの信く
人々等。そのくわり。その東は不問の問
のひそも誓い。ゆけは入の信く。その信く
たる金のあふれと苦の比果の深料若くは
そのひて見のひのひのひのひのひのひのひ

不問の目見かして其果のまんげせれ古
まじり業のそのや津波利の鏡小つる罪
今から信のひのひのひのひのひのひ

成田公一ト書つた方みお和佐ハ小澤也

今から信のひのひのひのひのひのひ

宗有信のひの信えとやのの
何根も常盤屋の糸の極まりまはハ
アノ子玉ハ

さん一文字屋の可造えんの新内第もあが宣う
おざかまのいへ 三つ ところやそのいさや 物内の方じやえん
祖富士太夫の門弁で合妻路里花と梅やし 今
あやう清元の三味線をも 弾き色思へば 人情本の作も
まろそふでむざむかまはヨトのよおら 調子のきろー神
樂の空ゆ。ましく ちやくまどましく

第十回

平何れも 百人の遍や 和漢と遠門で宮神くらといふ

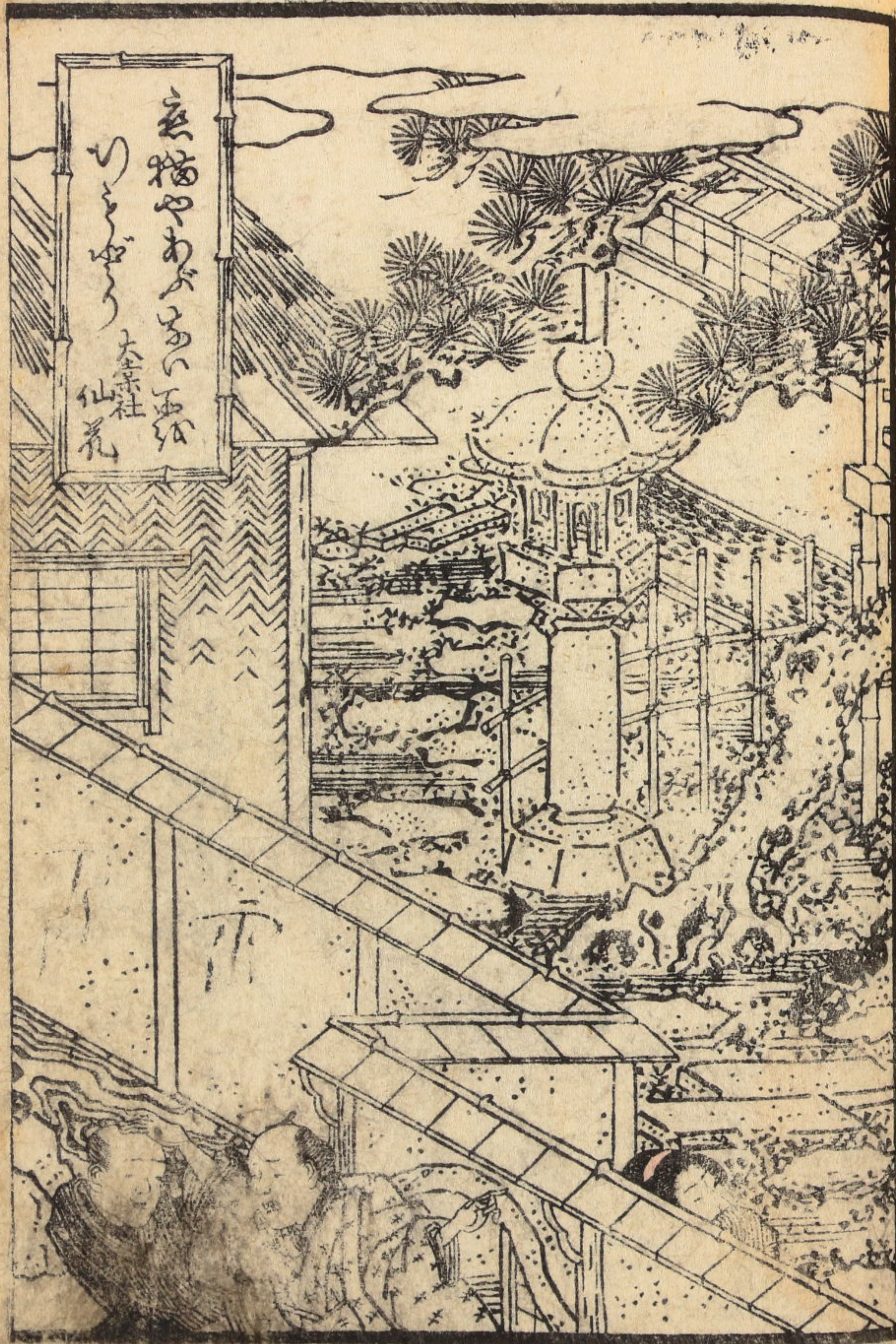
あつたの 聞かぬ 花で あまのまはるへ 酒一もやう 湯気
陰気よの遠ひがうら 合併もや けさのひつ 左十一エ
九陰気な あつた 哥俳諧をまるのまどまかまをきうゆでも
考へうらと 唾の 花よ ちりてわらふ 侍の居る人もあが
引合はらるる 花よ ちりてわらふ 侍の居る人もあが
あつた 哥も 俳諧も 随分 曲のあつた 可笑しき
またバの 中であつた 一のひやあも 一のひやあも 考へるあつた
後の 申すも 陰気な やや ちりてわらふ 侍の居る人もあが

おぼろおませうなま 余一 月そまじぶらみ玉八さん文
あさんんども腹の中へおれしちうらふま 酒落本せ
作へう 飯 藩をしうまるまいひまのる 奉天アニ
今流り人情本入素人ゆ 出ありものごうら文書も
柳水との公考永連の作者を 延は契と同ド板し小本
の作もさるるまふぶが 飯 藩の多くじづりらのみ
まもまじけ頃の室小飯藩は 擬てか存在ごりあうら上
ゆみあうらぶらふ 左十八たぐ 古門を居てもまごら一向

初夢あくるま度か 出ありものごま下月公みの先
生ふひのまふしそま 出葉の合まひかを加筆しそ月
並入出候とのらふらご 毛コタく月をえ 出まごうの鬼がよ
らあぞ日輪並入出候よる鳥が 宜おせ入をトあうら
らぬ 樂屋の終終長い産まハ 自然地金のまらぶ
出るものあそか 雲のてまらるのらるる 洞へまぐ 何のらるわ
お和佐嬢ハ何所へ びこのラト 四辺を見まら 平岩の女
中お付て 女ハアウ 産の方へお 性まらまら 洞へア

左様な事も一ろくなく人々を意屈しつゝおん
きりかき丸がらうて可憐らしくもあざむきぬ人ト
所にお和佐六茶ふたの枝を持つて欠出しとせぬ
其れ一とせしとせしとせしとせしとせしとせしと
欠あがる相終るぬひまがら 切しお終しとの
おがけられたまをわんまう能て居まうとらうま
居まうとら所の怖ひ人があそこきれたを
持まうらみまうとせしとせしとせしとせしと

まうとせしとせしとせしとせしとせしとせしと
らうとせしとせしとせしとせしとせしとせしと
ひ方へおまう 信ませんらま 酒ハ十二あまを
大まう眼が怖けるや玉八の側あす居まう
旦那まおねの方へ悪口がまらうま
昔まやイ二十八産の外るが
面白うらう見らう 鱈と角力をぬる所
ゆて見お入らうとせしとせしとせしとせしと



け辺の人へ気が薄ひくを捕と怖ひものヲトモ
めふらして威をせむさひかお和佐も腰氣ひりや著と
思ふゆゑなりもらぢぢらゝゝ氣味づるくも侍まりればり
りごと火瘃の度入字を書て火着をたひよと居るわ
あも勝を委めと三味線の書きまきし 調へて三味線の
音のまきまき 三味線の音のまきまき 調へて三味線の
まきまき 三味線の音のまきまき 調へて三味線の
まきまき 三味線の音のまきまき 調へて三味線の
まきまき 三味線の音のまきまき 調へて三味線の

その昔にわたの津天のぼくくあとのぼくくこの
勝言ふまじり神の者勝言ふまじり神の者勝言ふまじり
はなはたおぼくくこのぼくくこのぼくくこのぼくくこの
勝言ふまじり神の者勝言ふまじり神の者勝言ふまじり神の者
お和佐ハ國耳直 調へて美聲で新内帯も如彼り
変りまじりて清くはくし中ぐりの極み筋がある室ふ
ゆび 一上あが遠ひまきまき 調へて二柱の津とりよの
右の吉とあまのまきまき 調へて二柱の津とりよの伊弉諾

伊弉冉の尊とらうては世の始りのま方の元祖の神なる
 りサ （カミ） なるは人の世にておびたかまは 西ノイヤられハ
 勢う〜根固をまるとのう （カミ） それらうとも 秘しハ
 ままのり （カミ） 西ノ早く言ひて見ればは身の極む者
 おまの極む者羅娘の速のてぬぬやど 極を居るを
 言のサト

言ふる聲ハ疎みの外へいれ 因りよとまもこの後ハ
 清らりの聲と神樂の音が 風ハ傳えて 遠くひき

柳松おれ佐の世〜ハ〜

せんかひ

見ぬあつあつ

春里

のものへ



一文舎 柳水校合

清談松の調二編卷之中了

たせらるるやうに
ゆるゆると

あ〜やうに
ゆるゆると

清談 松の調 第二編 卷之三

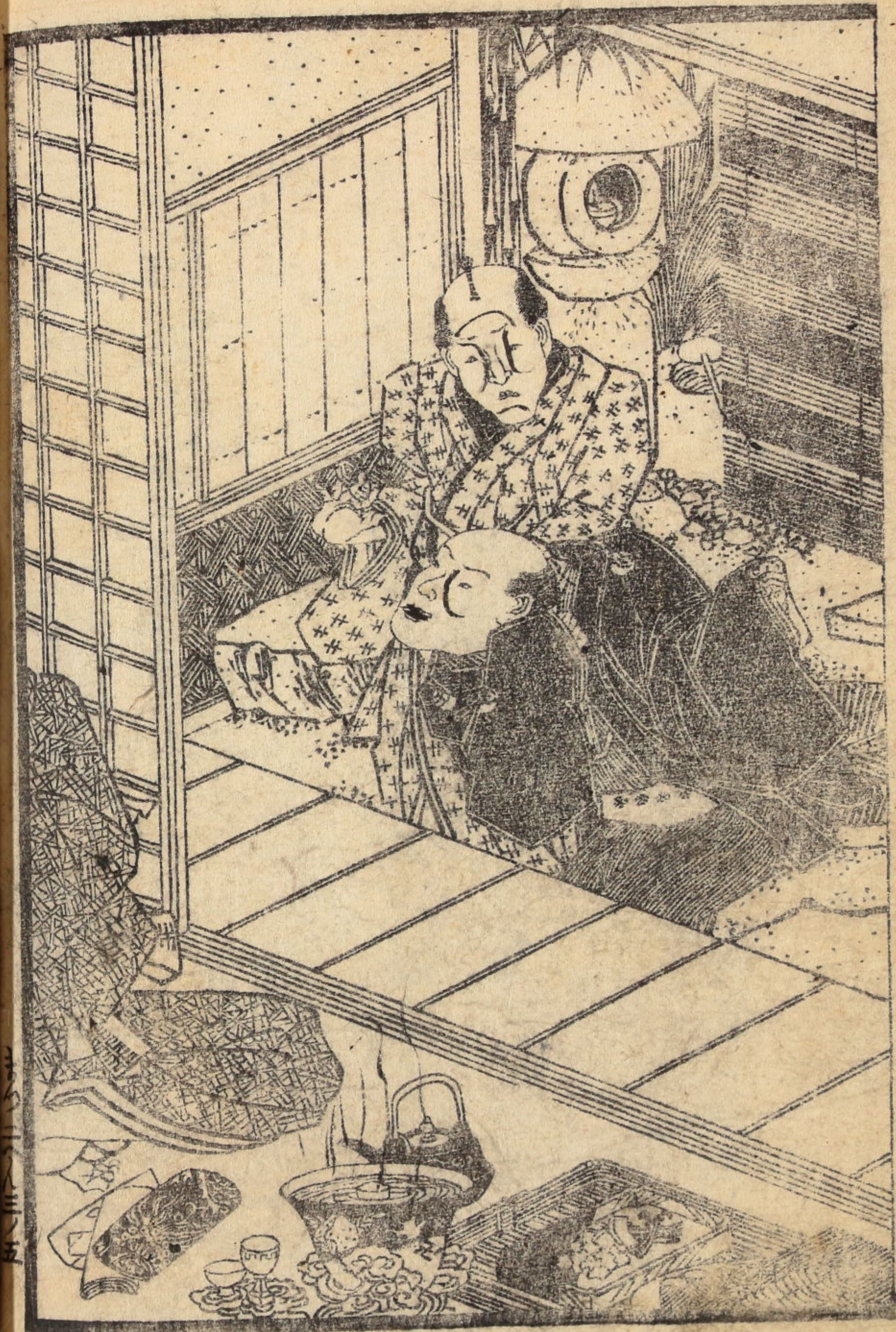
江戸 烏永春水 著

第十一回

暫時のいで 洞松の椽側の隙をかき明け 洞へお和佐
腰せらるるうらうらと 言ひきて お和佐の顔を直赤み
恥く... 解く... 帯を直く... 洞へお和佐
ふとお明りしやう 恐らくは出産まじ 洞へお和佐
放ても能くや 洞へお和佐 行をういて居るよやア

見くらひのさものぶぢのつまずんぞ 見 是でも 見 他人の 見 三々
 入ん 見 幸へ 見 のやうと思つて 見 出まらん 見 ぞらう 見 玉のサ
 側 見 うま 見 らう 見 へ 見 六 見 齧 見 が 見 出来 見 や 見 せん 見 ども 見 目下 見 赤
 兒 見 と 見 名 見 及 見 小 見 跡 見 いろ 見 吾 見 候 見 の 見 腹 見 ぬ 見 食 見 り 見 たり 見 幸 見 三
 お 見 茶 見 の 見 腹 見 小 見 食物 見 へ 見 石 見 葉 見 花 見 け 見 ち 見 湯 見 う 見 酒 見 ぐ 見 ら 見 なる 見 前 見 ぶ
 らう 見 酒 見 が 見 ら 見 幸 見 十 見 マ 見 言 見 止 見 て 見 玉 見 八 見 の 見 悦 見 物 見 を 見 う 見 け 見 る 見 と
 ま 見 ら 見 ぶ 見 り 見 幸 見 十 見 八 見 の 見 む 見 ぢ 見 ぢ 見 ま 見 が 見 能 見 う 見 名 見 也 見 産 見 ま 見 せ 見 う 見 幸 見 三 見 玉 見 公
 悦 見 物 見 の 見 ち 見 ぶ 見 ま 見 ら 見 幸 見 三 見 玉 見 八 見 の 見 ま 見 ぶ 見 び 見 玉 見 君 見 の 見 産 見 ま 見 ら 見 幸 見 三 見 處 見 女 見 と

りつと 見 容 見 顔 見 玉 見 と 見 の 見 ぶ 見 ひ 見 く 見 なる 見 花 見 の 見 唇 見 月 見 の 見 眉 見 葉 見 の 見 泣 見 け
 二 見 八 見 の 見 ま 見 う 見 う 見 ら 見 幸 見 十 見 一 見 谷 見 の 見 清 見 水 見 小 見 念 見 ま 見 なく 見 布 見 を 見 晒
 ち 見 居 見 ら 見 う 見 一 見 と 見 久 見 米 見 の 見 仙 見 人 見 見 見 う 見 よ 見 う 見 も 見 腰 見 の 見 白 見 き 見 の 見 通 見 せ
 う 見 ち 見 玉 見 一 見 コ 見 ヲ 見 く 見 又 見 口 見 を 見 出 見 ま 見 ら 見 あ 見 ま 見 ら 見 幸 見 三 見 派 見 次 見 ら 見 幸 見 三 見 玉 見 一
 ま 見 ち 見 も 見 あ 見 ん 見 ま 見 う 見 漆 見 款 見 の 見 後 見 ぶ 見 ら 見 幸 見 三 見 玉 見 一 見 マ 見 ト 見 と 見 ち 見 が 見 あ 見 ね 見 の
 ま 見 ち 見 ら 見 の 見 祈 見 サ 見 み 見 ま 見 ぐ 見 初 見 活 見 八 見 壁 見 く 見 言 見 う 見 て 見 夫 見 ら 見 う 見 ち 見 なく
 當 見 世 見 小 見 活 見 説 見 ち 見 の 見 ぶ 見 ち 見 面 見 向 見 ち 見 の 見 や 見 せ 見 ん 見 ト 見 言 見 ら 見 ら 見 う
 ま 見 ち 見 悦 見 ち 見 ら 見 幸 見 三 見 玉 見 一 見 八 見 へ 見 幸 見 三 見 夫 見 ら 見 ち 見 同 見 ち 見 せ 見 ん 見 の 見 十 見 六 見 葉



おはせとて候て居るにこそお言ひしやう聞かせんと言ひし
立勿体なる番のうんのこと言ひしものや早く言つて聞
かせお呉んぬせ人今ぬ人でもあつて居るうらと言ひし
ホ三人が見るに思はうござるまはくう思ひ切つてやまは
うか腹をたまごて聞かせんヨと言ひしおの肩へ可
かゝらへてつて居るうら。あつらメうらと思ひしや
身がどつとたなまうらとぜ。湖へム少候いの交うらその處女が
おぬしは頼とのみのうら。まうらまうら松が思ふぬやうなでも

とら物で居るの相違わうら頼もとのみの外ののや
ゆらんと推量たうら娘とあつらうと肩へつてまうらせて
サお頼もとのみのうらと言ひと處女と言ひしが頼も
あつませんう。まうらんとも嫌でありませぬけとぞお美枝の
裏緒が切とまうらうらも後立ておらんぬらうらまうらとみ
相違ひんの交ひあつちやうらまうら。まうら。大方おんぬ
まうらうらと思つて居るまうら。佐十一あつら一の處女が玉の
見まで頼んどらうらまうら。面白うらまうら。目ね。湖へムら。まうら

其處女がわし王八の爲のわらわらも 知事ねん多 王八
まふサきまぐら 且取のお見えどけのわらわ子 佐十
言つてわらわりの肩おしきとるる中が可突ノツア
まふ王八さん今お清波の娘へまじらう物方へ性まじ
た人 王八うら牛の血茶の方へ性まじらうけ 王八
お神樂のわら新でわらまは子 王八左様サ 王八性つて見
たのりんごま且那王 王八酒の空とお使のわらまじつてお神
樂とわらを見まのまのりんごま 王八性まじらう人 王八

まんまのひ新の思ろふし七番を考後集つて来やう
流人のどふまるは新で吞て居るとも 王八一過あるとも
内勝も 王八性まじらう一過あるとも 王八且那と
私にうらまやうひらと先刺の怖人 王八性まじらうと
うら 王八性まじらうかどとらやうお和佐さんの 佐十作通つて
王八性まじらうか借りやう 佐十性まじらう王八性まじらう
あの娘小かが残つて居るさきご 王八性まじらうひらく
知らびり人 王八性まじらう私達も 王八性まじらう性まじらう

のげやうわく 玉八 兎角おんきんでなけつるや 夜が明や
 せん 玉八 玉八 自家の勝手の能時あやうおんきん
 袷ねく 玉八 玉八 玉八 携来サビハ糸で女をまよはせ
 其其救と知りぬサマ 獨りて海口に居るうち早
 流客外へ出て洗ぬぞ 玉八 びりりりりり 玉八 玉八
 左邊つとの後寛ひりり けつくとお可矣な身振と
 ありがら引つぐり外へ出たおもうやの居齒あう
 めて影を呼ぶぞ 玉八 福場引

三三三三

第十二回

話分翻茶洞松がのまご春和町小住居一廣衣が雀の猫
 放ち其まとりり女小洲流てううく月日を狂ひ暮をゆふ
 多分の金をつるひ捨流方ひ引負も金程出来けは
 西親の腹まきまう一家一門のほ茶店の昔も類の向
 ぬくま根ふりり何まぬも鎌倉の地を替く放と一お業
 事して後人を殺んで院とて考うんと何を定ぬ目頃かひ覚
 一尺八を幸ひと候の虚を備ぬ出きて三行の園八橋村の

やこ とらる 考まうの存方の叔父のわづけつと便つて身で落付んぬを
きまうの海入へとらるざ〜 往々たるけき旅のませいもごとく
めいゆらねども 目くらげ三州八橋村のつら叔父の家を
尋ねて先外より内の様子を窺ひ見るふ郡ふ稀なる
家作の結構さふ 潤松も公慶居てとらるるべ一年お
二葉うると人ふもつても不自由なるまのわづらと
先叔父の對面して公慶家出るなる古の始末を國松
らとつと物落りら年替くのらるるまのつと下を頼ける

ひ叔父とのふ者ゆゑそて尻屋なる人あそ田舎使あるの二筋ふ
ひと及潤松の女希はひの金をせせの捨つるのを大ふを服
其後潤松と一問の中へを委軍同松あして相込早速
孫舎人言つる〜 親達より多國のわづらと三度の版の
外ハ見とふ人さ入るりけさば潤松ハ案ふ相送〜 只對
と目を送つて孫舎の便つて移り外ハさつりけるは
春の中旬こそ目も蒸らるふ空晴まて四方の時わくわハ
おまじごき舞ハ秋のむね七一同の月めりともり 後うけを

か 居る物の本を額に入れてとらうくとおぼしきしうりまおつても
け家の腰元お幸との入腹は籠み葉の者花のとくしうり
と金魚のあせ片のみ葉よ葉骨と持て入まり酒松の枕
元へ顔とおせせ 若旦那さぬへお葉をこころしうり
お目をお覚しぬのそらうしませんうそつておゆもろひごみお眠て
お風邪でもおとせしと思うお葉はまたヨトのりまて酒松の眼を
あさうりあさうり起むらう 酒一アおゆりごみおゆりごみとらうくと
やうりしうりト言ひまうりお葉の顔を見て 酒一アお幸さん

お葉 俗時のるふ室へお出づらう 幸一アアア今まらうと
あうりでおゆり産まはヨ 酒一アあうりうもそつてまら俗時づら
おらんたか 膝より移る目が曲つておぢご 幸一ハイいまごら
お時半がゆりまらうごらうらうらうハッ半時を産ゆり産まはうと
言ひつて葉を汲んで 酒松のみ葉 幸一アアお葉のみ葉
はゆり食ひまらまらのが 酒新造さぬが 酒退屋でゆりまら
まらまらうらうらまらみゆげらと 酒作まらうと 酒一アお葉のみ葉
酒休切み 叔母さんがおむをお付らまらうての葉も物産らふ

まゝお入悪くうてもよろしくおねが
相一 さまおアのうがごの お茶のそごーくもふも 後東おて
業のふう 業 左様さうお鏡巻を 持のてまあり早急さ
お作のそとせ入ト言ひつゝ 立て納戸へ行きわごま
桐倉と鏡巻を 持参り 業 室の籠へ 出たませんヨ
相一 二ごらと東おて 入か 呉さう 籠のト 是さう 桐倉の
まゝ 鏡巻を 直一か 業ハ 後へ まらうと 髪を 結ひまら
焼の 籠る 二人の 顔をお 業ハ ちうと 赤字の 思ひ だわらうと

一 年ごの 涙と 泪松ハ 見さう 不審と ちうさう 相一
お 業さん お 茶の 籠ぞ お ちう 眼の 涙と 一杯 備て ちう
梅 梅でも 悪いのさう 客う 髪ハ 結ひまら ども 籠る 早
業でも 吞がりの ぜト 言ひまら お 業ハ 氣の 毒類 業 二 梅
梅が 悪くも 入んとも ござる ませんヨ 相一 三 女 丈ど
何故 今の 籠の 涙と ちう びー のご入 こそ とも お 茶の 籠
言へー 男が どの どの 其 男の 丈を 思ひ 出ー ちう
言へ 梅の ちうけら 業ハ 一 五 せん 丈の せん ませんヨ

細い至るいふ言ひもあせんとお茶の箱も可也ら一
處女は流く思ふも男は余程能月日の下で生るの
のう幸へし若旦那さぬえんふお舞を拵ぐ一ちやアを
在出産まらヨ細いさるるのう我ハを南がうらやま
志のくうい足出のヨ幸へし空をおはわそと一ま
せも若ハ様倉ふな力入の時ふぬさぐ窪と中らの娼妓
流くお別様拵ぐ一こやきまでござるかまらまぬ
詩のお雪さぬゆいん室にお美羅お娘嬢がお言号のお嫁

み極ごと也新造さぬがお出でござるおま一こののを極
田舎にお出拵ぐ一ちやアさぞ一日も早く様倉へお歸
な成さるうござるおまをうね入 細いさ大遠のサそ
尤まが窪へも住るさまらあつけさどもまへんあは
仍も金と書このごうらたらうらまらるるのう
赤湯が流のお雪この娘も言号するのう
遍も顔を見こすまも一さぞ我が思ふぬらふこと
る報令田舎の一生住居ても能うお茶の箱も可也

らゝの處女の側へ居るのどと思つて行かぬ途出
る相談さま車へ登り貴客のへんか懸を拵るの
おのりまの目酒ののりまののりまののりまの
かどやほ丸漆のまをのり野良こと思ふらうが
救されても思ひ切らぬまのり可也う詮方がね下
まてお幸のまをのりまのり踏切ぬ哀のるわろののり
志の胸のつうて言ふまのり跡や先身の腹丸の顔赤
らちてさへ俯向形容の可也らさ酒松ハけ程より

お幸の懸きぬ抱と携わらむとおのりまのり今目か
化舞まをのりまのり美羅くまのり橋をまをのり
まのり見まをのり居らうか酒のりまのりあまのり
のり橋のりまのりお幸と一所の居て懸と結つて
らうのりまのりおのりまのり女房の橋をのり
らうのりまのり車へまのり私のおのりまのり小蠅
二人の居るのりまのり千集でも形やうて居度
のりまのり



○ 市川有因次

芳名

我女

舞臺

